

資料提供(甲賀・教育同時)

甲賀市・史跡紫香楽宮跡(宮町遺跡)出土木簡について

標記のことについて、下記のとおり記者発表を行いますので、別添により当日の記者発表資料を提供します。

記

発表日時 平成20年11月17日(月曜日)午前10時より

発表場所 宮町多目的集会施設(甲賀市信楽町宮町1155番地)

発表対象 甲賀記者クラブ、教育記者クラブ

解禁指定日時(新聞) 平成20年11月19日 朝刊
(テレビ・ラジオ・インターネット) 平成20年11月18日 17:00

その他 記者発表時には、小笠原好彦 紫香楽宮跡調査委員会委員長と栄原 永遠男 副委員長が出席のうえ、補足説明を行います。

遺物撮影 前回発表の木簡よりも文字は鮮明で、肉眼でも十分に判読できます。
出土木簡は発表当日も会場で展示しますが、動画等の事前撮影が必要な社については、以下のとおり撮影日を設定しています。

場所 宮町遺跡調査事務所

日時 11月14日(金曜日) 午前9時30分～午後4時30分

対象物が小さいため、撮影時にはマクロレンズの使用を推奨します。

遺物展示 出土木簡の一般公開を行ないます。

展示期間 11月19日(水曜日)～22日(土曜日)

午前9時30分～午後4時30分

展示場所 宮町遺跡調査事務所

(甲賀市信楽町宮町641-1 0748-83-1919)

問合せ 甲賀市教育委員会 歴史文化財課 担当 鈴木

電話 0748-83-1919 (宮町調査事務所)

0748-86-8026 (歴史文化財課)

甲賀市・史跡紫香楽宮跡(宮町遺跡)出土木簡記者発表資料

「門籍木簡」「食品関係木簡」について

発表日時 平成20年(2008)年11月17日
午前10:00~

場 所 宮町多目的集会施設

発表主体 甲賀市教育委員会

1. 調査名称 宮町遺跡第37次調査

2. 調査期間 平成20年2月15日~3月31日

3. 調査面積 350 m²

4. 出土木簡発見の意義

朝堂院地区の北方に、聖武天皇の御在所にかかわる部署が存在していた可能性がきわめて高くなった。

紫香楽宮で門籍制が実施されていたことがはじめて明らかになった。また、紫香楽宮に複数の区画施設があることが推定できることとなった。

5. 位置と目的

調査地は遺跡の中央、紫香楽宮の中心区画である「朝堂地区」から約150m北東方向に離れて位置する。

この地域の過去の調査では、第13次調査(1994年度)で「造大殿所」、「御炊殿」、「皇后宮職」と書かれた木簡や「御厨」と書かれた墨書土器が出土している。また、出土土器についても、質量ともに他の地域と比較して優位にある。これらから、調査地の近辺に王権にかかる部署が存在することが考えられていた。

37次調査は、このことを念頭に置き、「朝堂地区」北方の遺構の実態解明を行うために実施した。

6. 調査の概要と遺構の時期

発掘調査では、検出長22.5m以上×検出幅12.7m以上×深さ1.2mの谷状地形(SV13258)を確認した。

周辺の地形観察では、調査地北東に「フロ谷」とよばれる谷が認められることから、宮町盆地の中央を南北に貫流する浅い谷状地形が埋没していると推定される。地形やこれまでの調査結果を総合すると、谷状地形の幅は30~40m程度と推測できる。

次に谷状地形の土層断面観察では、堆積層の上層では中世の遺物が、中層では平安時代後期の遺物が出土し、奈良時代中頃(8世紀中葉)の遺物が出土する下層の厚みは0.2~0.3m程度であった。

紫香楽宮造営に際して、宮中心部に存在するこの谷状地形をそのままにしておくと、盆地の平坦部がこれによって東西に隔てられ、土地利用に相当な制約を受けるはずである。しかし、

発掘調査で確認した遺構範囲では、東西両方の平坦地に建物跡が展開している。

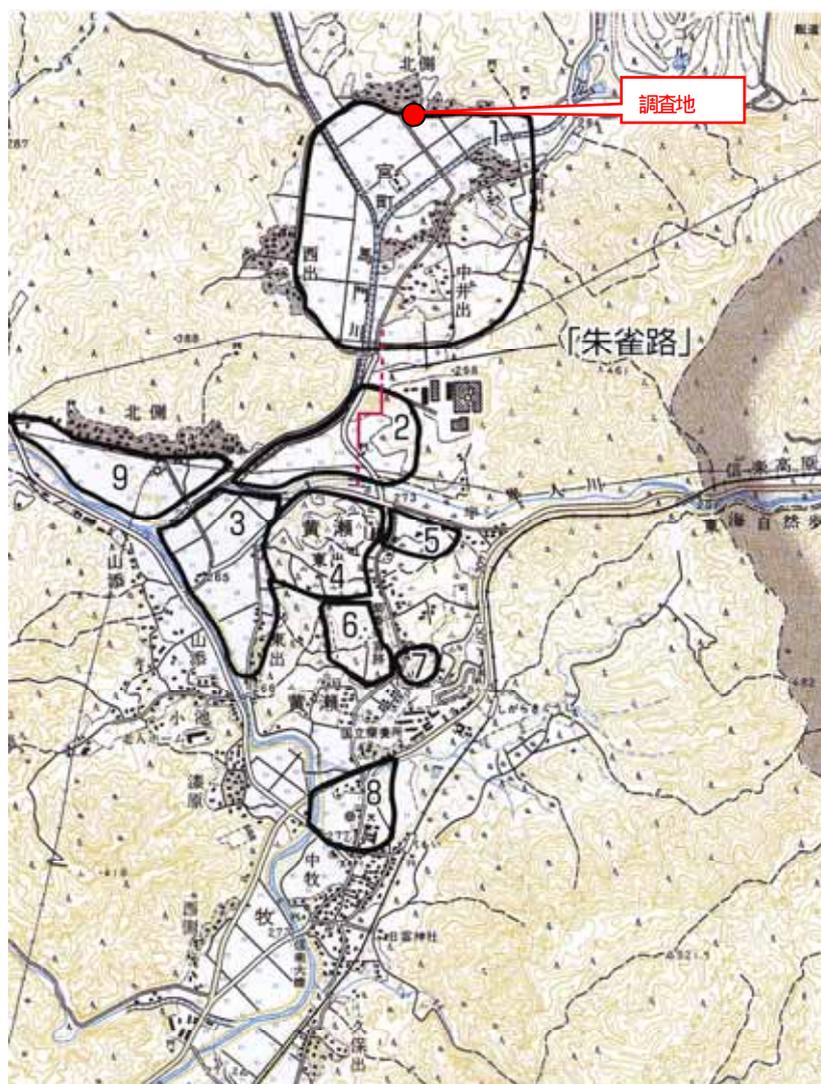
このような調査結果から、紫香楽宮の規模を考えると、宮域を一体のものとして利用するためには、この谷を紫香楽宮造営の際の土地造成で埋め立てたと考えるのが妥当であり、その時期としては、紫香楽宮期でもごく最初の段階と考えられる。

また、谷状地形の上層から中層に堆積する後世の遺物は、紫香楽宮廃都以降、いったん埋め立てられた谷が、徐々に自然地形に回帰していったことを窺わせる。

7. 出土遺物の概要

谷状地形の下層には、奈良時代の土器が集中して出土する地点が認められたことから、整理用コンテナ約130箱の土壌をサンプル採取した。

その洗浄作業は今年度も継続して実施中である。現時点で約6割程度の洗浄が終了したところであるが、植物種子や物差、人形代などの木製品とともに19点の木簡（木簡13点・削り屑6点）が出土している。



- | | | |
|----------|-----------|------------|
| 1. 宮町遺跡 | 2. 新宮神社遺跡 | 3. 東出遺跡 |
| 4. 東山遺跡 | 5. 鍛冶遺跡 | 6. 史跡紫香楽宮跡 |
| 7. 東出西遺跡 | 8. 雲井遺跡 | 9. 北黄瀬遺跡 |

1. 紫香楽宮関連遺跡の位置 縮尺1:25000

8 ・出土木簡の积文と形状

积文下段の数字は木簡の大きさ(縦×幅×厚)・型式番号は木簡学会の方式に拠る。

1 ・ 「 < 𠄎 」	(178) × 32 × 7	0 3 2 型式
2 ・ 「 < 心太二古 」	234 × (20) × 7	0 3 2 型式
3 ・ 「 止𠄎𠄎 」	116 × 15 × 2	0 5 1 型式
4 ・ 「 家伊毛 」	92 × 13 × 2	0 5 1 型式
5 ・ 「 子 」	106 × 12 × 2	0 5 1 型式
6 ・ 「 由 」	103 × 12 × 2	0 5 1 型式
7 ・ 「 栗 」	109 × 15 × 3	0 5 1 型式
8 ・ 「 梨 」	101 × 15 × 3	0 5 1 型式
9 ・ 「 𠄎 」	(36) × 12 × 2	0 1 9 型式
10 ・ 「 𠄎 」	74 × 11 × 2	0 1 1 形式
11 ・ 「 < 𠄎 〔醬力〕 四斗 𠄎 」	112 × 16 × 3	0 3 2 型式
12 ・ 「 < 𠄎 移 」	(70) × (14) × 2	0 8 1 形式

13 · 『申外西門籍』

『多治比』

『道道道』

『鹽』

(177) × (25) × 5

081形式

9. 出土木簡の検討

食品名が記された木簡

今回の出土木簡で注目されるのは、2～9の8点の食品名が記された木簡がまとまって出土したことである。これらはさらに、2と3～9の2類に分かれる。

後者の3～8は、形態がよく似ている。いずれも長さ10センチ程度、幅12～15ミリ程度、厚さ2～3ミリで051形式である。

9は下端が切断されているために019形式としているが、本来は051形式で3～8と同類であろう。また、記載内容がただ食品名のみを書くだけであることも共通する。

3「止己呂」(ところ)はヤマイモ科の食材()、4「家伊毛」(いえつゐも)は家芋(サトイモの別称)、6「由」は柚かも知れない。5と9は判読できないが、形態の類似から見て、何らかの食品名が書かれていたのであろう。

ほぼ同形態の木簡は、これまでも宮町遺跡から出土している。

a「猪干穴」 93×15×3 051形式

〔物カ〕

b「鶏煮」 103×15×3 051形式

c「上鯖」 166×23×2 051形式

a、bは第16次調査、cは第23次調査での出土である。このうちcはやや大型であるが、abcともに今回の3～9と同類であろう。

これらに対して2は、大ぶりで厚めの材に大きな切り込みを入れ、ゆったりとした文字で物品名と数量を書いている。

このように、今回、食品との関係を示す木簡がまとまって出土したことは、第13次調査で「御炊殿」の木簡、「御厨」の墨書土器が出土したこととあいまって、本調査区の近辺に食料保管・炊事関係の部署が存在していた可能性がきわめて高くなった。それは、聖武天皇の御在所に関わる部署であったと見られる。

外西門籍と書かれた木簡

つぎに、13の木簡もきわめて注目される。タテに左右に割られ、左半は下端が燃やされているが、両片は接合する。

これは、宮町遺跡で初めて出土した門籍に関する木簡である。門籍の制度とは、官人ごとに通行すべき門を指定し、その官人の官位姓名を記した門籍を門につけておき、通行ごとにチェックするものである。

13がどのように使用されたのかは、厳密には不明であるが、紫香楽宮において門籍制が機能していたことを示している。

さらに、ここに見える「外西門」は、紫香楽宮の門である。門は何らかの区画施設に開くものであるから、これによって、紫香楽宮には複数の区画施設が存在し、朝堂地区や御在所地区を区画していた可能性が想定されるにいたった。

また、第16次調査では、「部門」と書いた削屑が出土している。これも紫香楽宮における門の存在を示唆している。

10. 木簡から想定される紫香楽宮の構造

今回の木簡が出土した地区は、朝堂地区の北側の山際に存在する。この地区からは、聖武天皇や光明皇后との関係を示唆する遺物が集中的に出土している。上述したように、「造大殿所」、「御吹殿」、「皇后宮職」と書かれた木簡や「御厨」と書かれた墨書土器などである。

この点からすると、紫香楽宮は、朝堂地区と聖武天皇の御在所に関わる地区とが、南北の関係で位置していたことが見えてきたと言えよう。

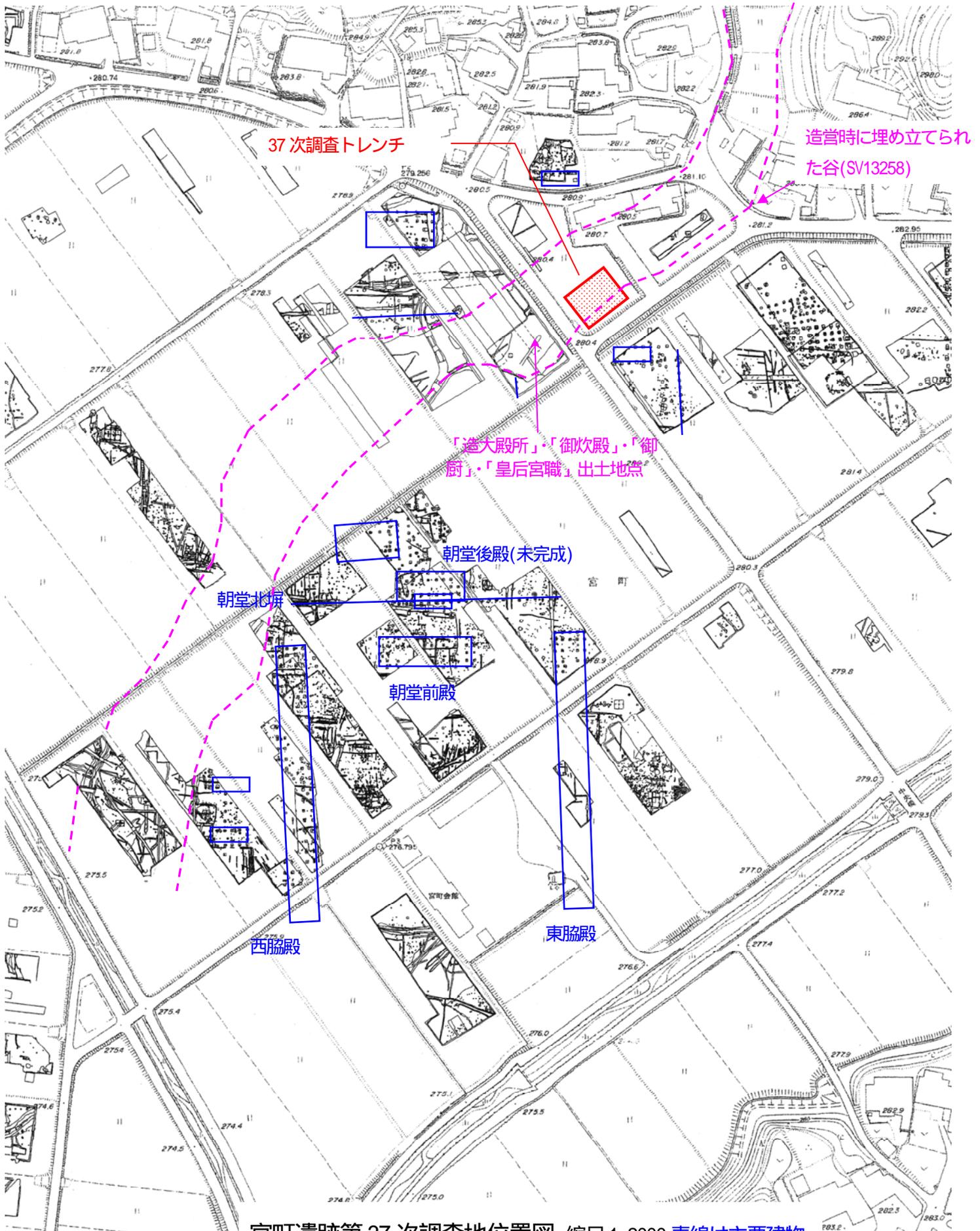
また、13 の門籍木簡からは、紫香楽宮が複数の区画施設によって囲まれていた可能性が浮かび上がってきた。

さらに、『続日本紀』天平 17 年 4 月壬寅（15 日）条によると、「京」が存在したことがうかがえる。

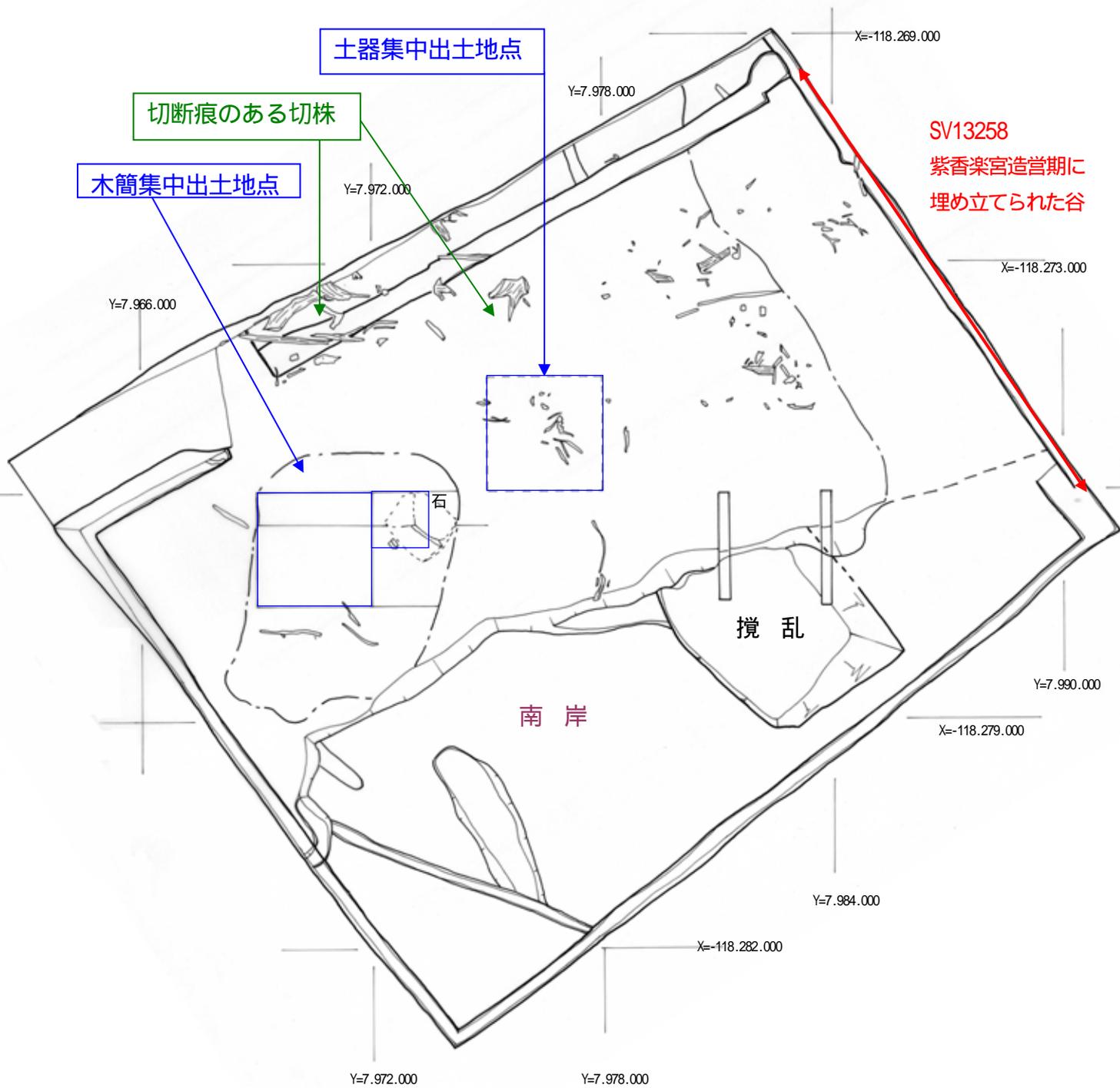
紫香楽宮は、朝堂や御在所を中心とする地区が複数の区画施設によって区画され、その外側に「京」が広がっていたのであろう。

11. まとめ

今回の出土木簡は、合計 13 点と少ないが、内容的には重要なものが含まれている。これによって、紫香楽宮の構造の解明が一步進んだことは明らかである。



宮町遺跡第37次調査地位置図 縮尺1:2000 青線は主要建物



宮町遺跡第 37 次調査遺構実測図 S=1/150



2. 宮町遺跡第37次調査全景(東から)



3. 木簡出土地点平面検出 (南から)



4. 木簡出土地点土層断面 (南から)



5. 土器集中出土地点の状況(西から)



1号木簡

心太二古

2号木簡



梨

8号木簡

栗

7号木簡

由

6号木簡

子

5号木簡

家伊毛

4号木簡

止己呂

3号木簡



四斗

11号木簡



道

道

道

曾

申

外

西

門

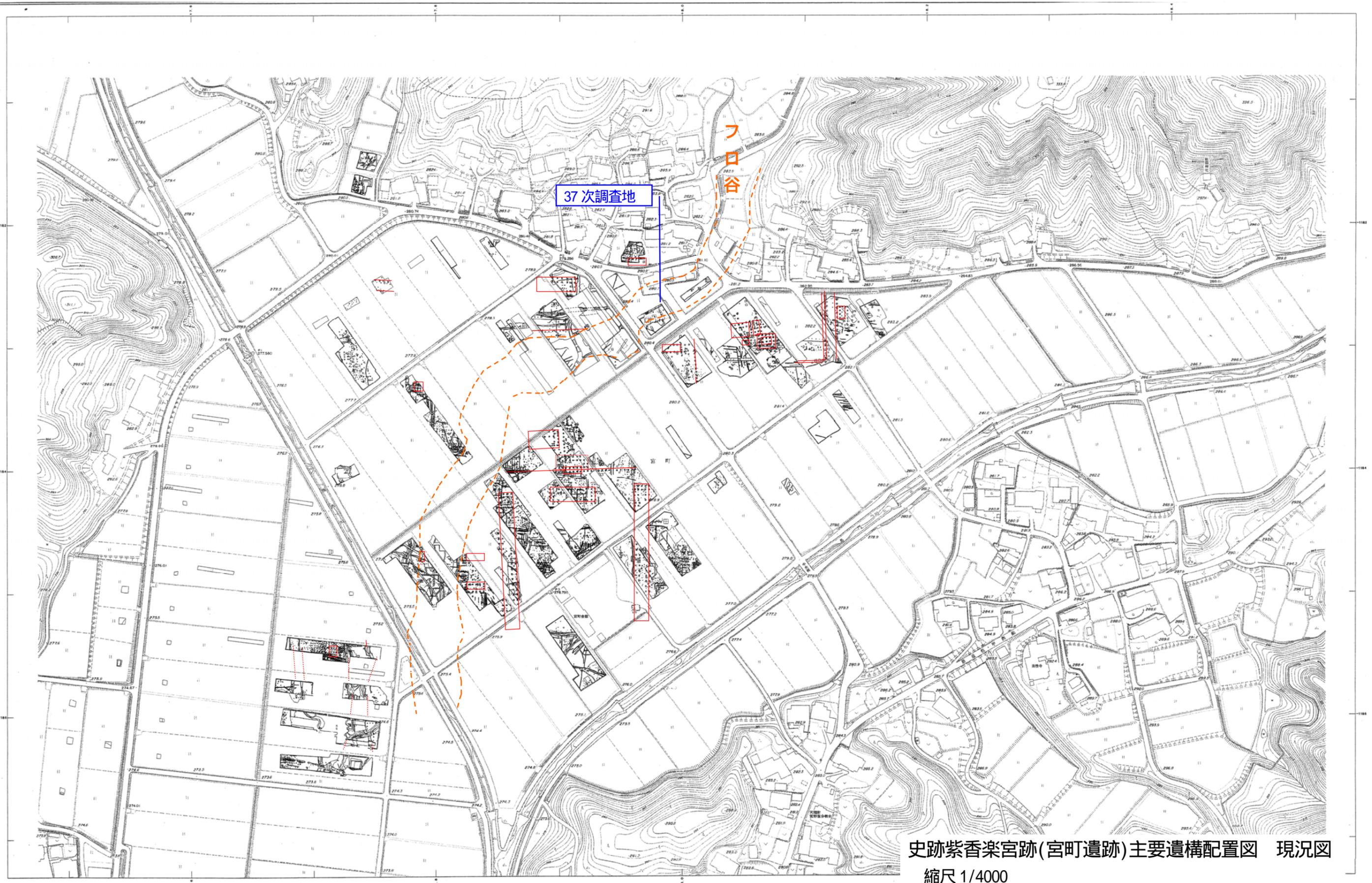
籍

多

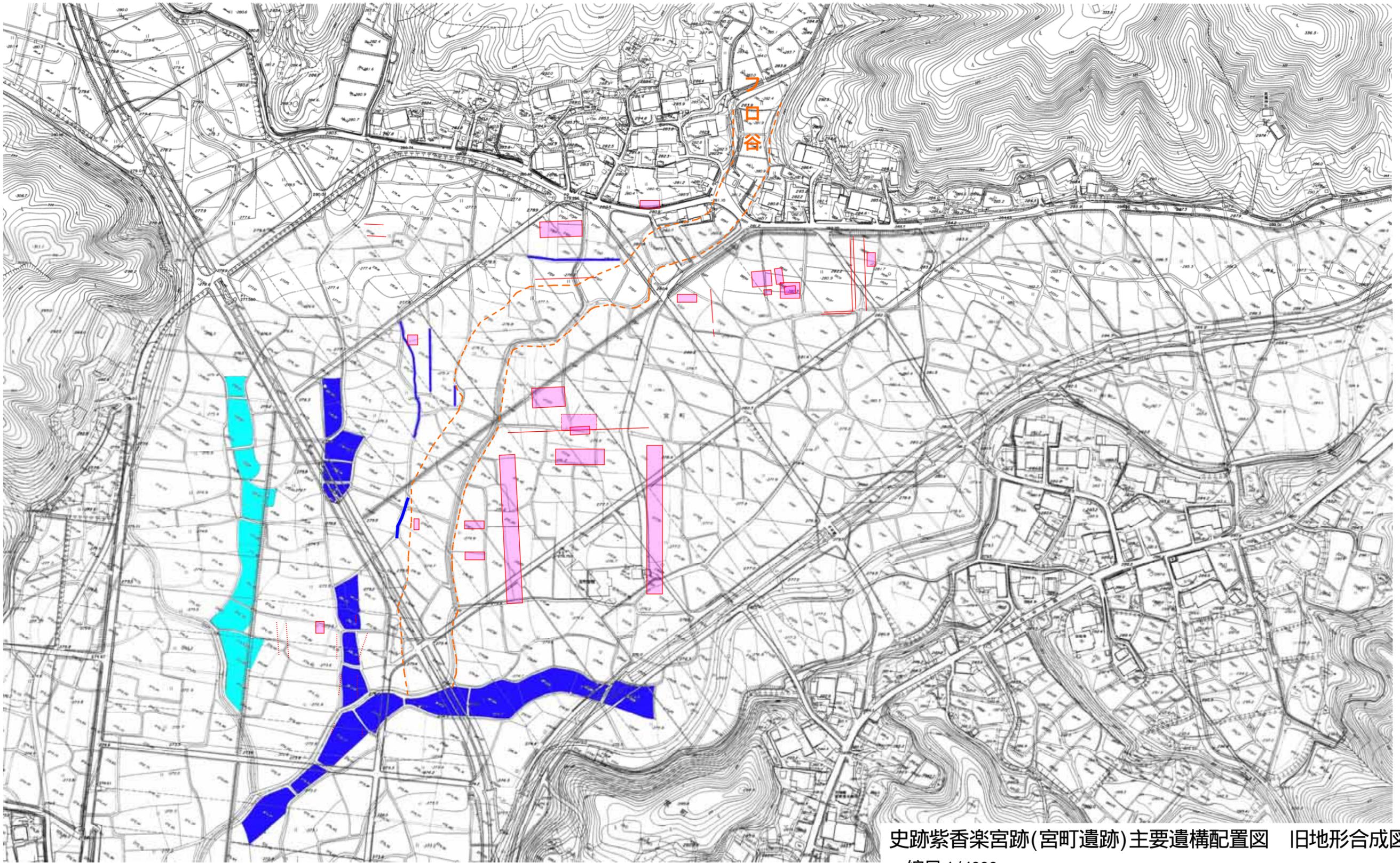
治

比

13号木簡

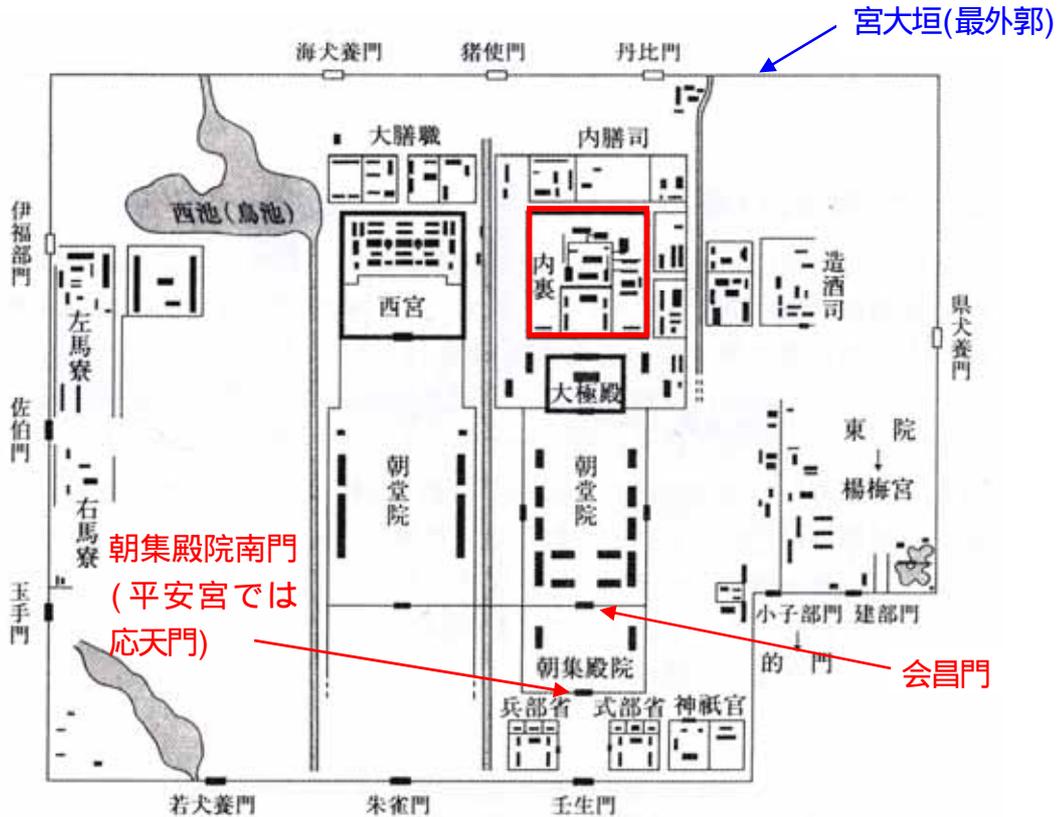


史跡紫香樂宮跡(宮町遺跡)主要遺構配置図 現況図
縮尺 1/4000

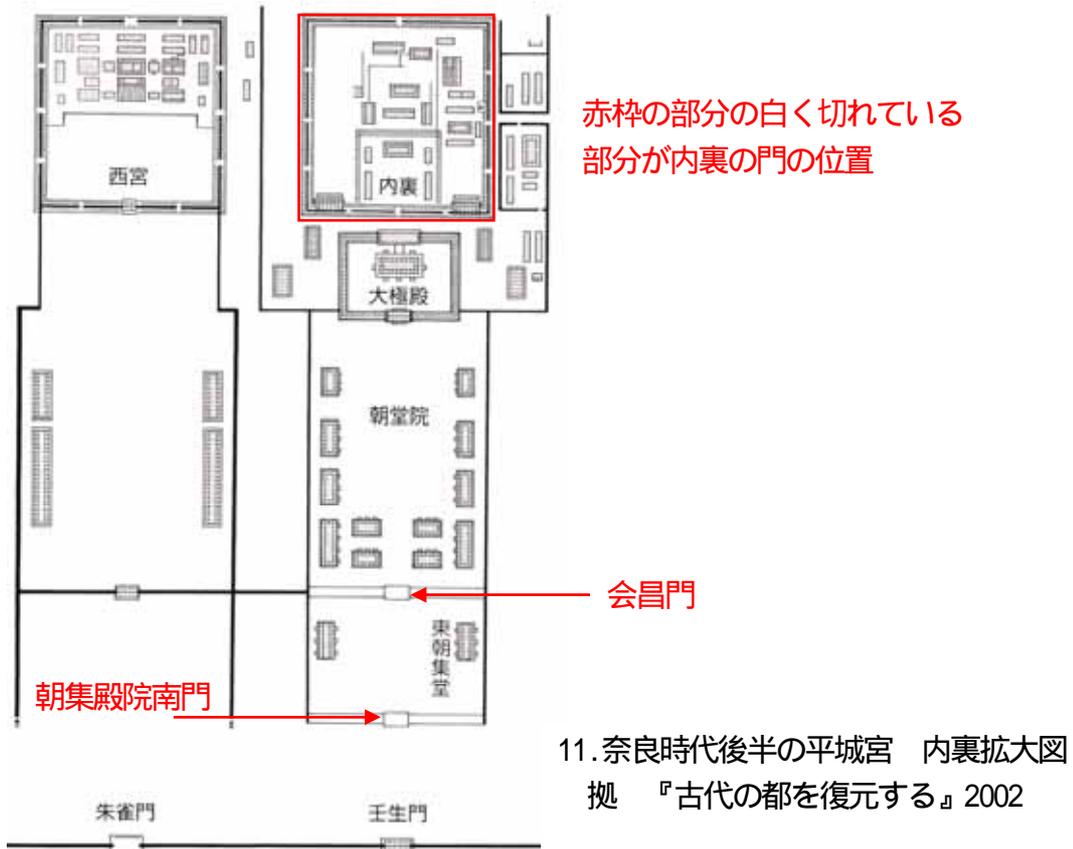


史跡紫香樂宮跡(宮町遺跡)主要遺構配置図 旧地形合成図
縮尺 1/4000

参考資料 門籍が施行されたと推定される諸門 平城宮の事例



10. 奈良時代後半の平城宮 拠 『日中古代都城図録』



11. 奈良時代後半の平城宮 内裏拡大図 拠 『古代の都を復元する』2002